

びんた

カール・ファレンティン や、ここにいたな、いやらしい奴め。何カ月も前からこの下種野郎を探していたんだ。こいつ、うちの女房にこっそりつけ文しやがったんだ。とうとうつかまえたぞ。これがそのお返しだ ほら、二

発目だ この悪党！ ほらもう一発、それからもう一発 この紳士詐欺師め！ これであなたは自分の破廉恥行為に返事をもらったって訳さ オットー・カイルハウアーさんよ。

リースル・カールシュタット なぜ私にびんたを食らわせるのですか？ 第一に私はあなたの奥さんをまったく知らない、第二に私の名はオットー・カイルハウアーではなく、アロイス・フライベルガーだ。

KV 何ですって？ あなたはオットー・カイルハウアーさんではない？ そんなことは考えられんな。本当にオットー・カイルハウアーでないんですか？ こいつは悪かった。何てそっくりなんだろう。どうもご免なさい。

LK おい、おい、ご免なさいじゃすまないよ。お宅は私を侮辱し、びんたを食らわせたんだぜ。

KV わかりました。その侮辱は最大の遺憾の念をもって撤回いたします。

LK それで、びんたの方は？

KV ええ、びんたの方はどうやっても撤回のしようがありませんな。技術的に無理です。

LK それはそうだ。でも私がお宅にびんたを返すことはできませんよ。これは技術的に可能だ。

KV なるほど。でもそれは無意味ですよ。私はオットー・カイルハウアーじゃないんだから。奴がびんたを食らうはずだったんだ。

LK それはそうだ。だが私もオットー・カイルハウアーではない。それなにお宅は私にびんたを食らわせた。

KV ええ、でも私があなただにびんたを食らわせたのは、あなたをオットー・カイルハウアーだろうと思ったからなんです。おわかりいただけませんか？

LK だろう、とは何だね、私はその男ではないんだぞ。

KV でもそれは仕方ないんですよ、あなたはあいつにそっくりなんですか

ら。

L K それは私の責任かね？

K V いいえ、でも、私の責任でもない。

L K 今度、人にびんたを食らわすときは相手をよく見るんですな。そうすれば、こんなことにはならないだろう。

K V 私はよく見ようとしたんです、でもあなたがあんまりすばやく通り過ぎたものだから、ちらりとしか見えなかったんです。

L K 馬鹿らしい。私とそのカイルハウアーかどうかお宅がよく見きわめられるよう、私にゆっくり歩けと言っんですか。

K V こんなおしゃべりは無意味ですな。私はあなたに陳謝しました。次はびんたの方も折り合いをつけましょう。

L K 折り合いって何だね 訴えてやる。

K V それはやめて下さい。そんなことをしたら私たちは無益に奔走しなければならなくなります。びんた一発につきいくら要求するかおっしゃって下さい、お支払いいたします。

L K よろしい。お宅は私にびんたをいくつ食らわせましたか？

K V 覚えている限りでは六発です。

L K 一発につきいくら払ってくれるんです？

K V 一マルクではどうでしょう。

L K 恥知らずな人だ。あんな目の覚めるようなびんたが一マルクこっきりだなんて、それはダンピングですよ。

K V それ以上はお支払いできません。

L K よろしい、それなら訴えます。

K V まあ、まあ、そうしたら、一発につき一マルク五十。六掛ける一マルク五十で九マルク。はい、九マルクどうぞ。

L K どうも、どうも。こりゃ何ともあつという間に稼いだ金だなあ。もしオットー・カイルハウアーさんがあなたが人違いしたと聞いたなら、腹を立てるでしょうな。